絶対最強捜査官～リアン・ハートネスの物語～

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対最強捜査官～リアン・ハートネスの物語～

【Ｎコード】

Ｎ７１５３Ａ

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

エスパーの存在が当たり前になった現代世界・・・アメリカのＦＢＩ本部に、最強の特務エスパー兄妹がいた。これはその中の次女、リアン・ハートネスの物語。

（前書き）

このお話は、［［ＦＢＩから来た女］］の『播磨紅子登場、そして仲間探しの旅行へ』～『新たなカップル・白野美保と瀬藤銀一との出会い』の間にあった話です。そちらも合わせてお読みください。

登場人物紹介

ユーリ・ハートネス（２３）

ハートネス兄妹の長男。
ＦＢＩ捜査官の特務エスパーで、レベル９の重力念動能力者（グラビティ・サイコキノ）。
重力を操って、あらゆる物体を破壊する事ができる。
ただ、彼は年長者なので、他の弟妹と比べると制御装置（リミッター）なしでもある程度超能力をコントロールする事ができる。
超能力の力は一番最強で、ＦＢＩ捜査官の中ではＮｏ．１の実力者。
ジョディとは境遇が似ているため仲がよく、１５歳の時にユーリの方から彼女に告白し、結婚した。
ただ、ユーリはジョディには頭が上がらない。
短気で暴走気味な妹達をなだめる一方で、自分自身も感情を抑えられない事もある。

リリー・ハートネス（２０）

ハートネス兄妹の長女。
ＦＢＩ捜査官の特務エスパーで、レベル９の氷体質瞬間移動能力者（アイス・テレポーター）。
瞬間移動の超能力で自分や相手を移動させられる他、自らの氷の能力を使った、アイス・ギゴリアス・バーンという必殺技を持つ。
リリーの体温は元々低めで、制御装置を解除して彼女がフルパワーを発揮すると、あっという間に体温が－２７３℃まで急激に下がる。
これを応用して、火災現場を超高速で解決するのが得意分野。

兄妹の中で唯一、関西弁でしゃべる。
瞬間移動の能力と、－２７３℃まで下がる体温のおかげで、ＦＢＩ捜査官の中ではＮｏ．３の実力を持つ。
唯一の弱点は、耳。

リアン・ハートネス（１４）

ハートネス兄妹の次女。
ＦＢＩ捜査官の特務エスパーで、レベル９の帯電体質接触感応能力者（エレクトロ・サイコメトラー）。
触った物の情報を、ほぼ１００％の確率で得る事ができる。
幼き頃、雷に撃たれた事で帯電体質となり、雷を中心としたありとあらゆる光を吸収し、力として蓄える事ができる。
また、体の中でこれを微調整させて発電し、放電させて相手を倒したり任務を遂行する事ができるため、ＦＢＩ捜査官の中ではＮｏ．２の実力を持っている。
実はかなりの悪女。

アスカ・ハートネス（１２）

ハートネス兄妹の三女。
ＦＢＩ捜査官の特務エスパーで、レベル９の風力水念動能力者（エア・アクアサイコキノ）。
風と水を操る超能力を持ち、トルネード・スプラッシュが必殺技。
男言葉を連発し、かなり短気な性格。
ただし、いざという時には仲間の事も気にかける、やさしい心の持ち主でもある。
超能力がサイコキネシスのため、かなり強いが、少々暴走気味の事も多い。

リリーとよくケンカする。

サスケ・ハートネス（１０）

ハートネス兄妹の次男。
ＦＢＩ捜査官の特務エスパーで、レベル９の深緑物体操作能力者（フォレスト・マインドコントローラー）。
ありとあらゆる物体や生物を遠隔操作で操り、攻撃や防御に利用する。
リーファス・ウィプ・キャプチャーが必殺技。
最強レベルの彼の力なら、土に手を添える事で、地中に埋まっているツタなどを飛び出させて操る事もできる。
基本的に姉妹ゲンカには口を出さず、彼自身もあまり兄弟ゲンカはしない。
実力は確かなのだが・・・
植物を操る事が多い超能力のおかげで野菜などについても詳しく、兄妹達の料理は主に彼が担当している。
健康的な野菜中心料理が好き。

赤井秀一（？）

ＦＢＩの捜査官で、かなりの実力を持つ男。
昔の事件で負った古傷を隠すために、ニット帽をかぶっている。

ジョディ・スターリング（２３）

ＦＢＩの捜査官で、オチャメな女性。
ユーリの愛妻だが、ユーリを尻に敷いている。

リリーの事は妹のように思っており、リアン達3人は本当の娘や息子のように思っている。
キレると結構怖い。

ジェイムズ・ブラック（？）
ＦＢＩ捜査官達のボス。
階級、実力共にまったく不明のじいさん。

ミルク・シャローム中尉（？）
太平洋戦争中の実験によって生まれた、ただ一頭のメスのエスパー・シャーク。
レベル９の予知（プレコグ）能力者で、予知は１００％の的中率を誇る。
かなり高年齢のおばあさん。
サメだが、トビウオや魚が好物。

服部岩蔵（５０）
ＦＢＩの捜査官で、、ユーリ達の父。
さまざまな超能力を合わせ持つ合成能力者。
子供達の教育には厳しい。

レイン・ハートネス（３９）
ＦＢＩの捜査官で、ユーリ達の母。

さまざまな超能力を合わせ持つ合成能力者。
岩蔵の愛妻で、ロシア人の女性。
５人の子持ちにはどうみても見えない、魔性の女。

ロズゴート・バリー（２２）

ＦＢＩの捜査官で、『神童』と呼ばれる１人の青年。
さまざまな能力を持つ合成能力者で、ユーリやリリー達の親友。

ヴィンセント・キース（１９）

ＦＢＩの捜査官で、『神童』と呼ばれる１人の少女。
さまざまな能力を持つ合成能力者で、ユーリやリリー達の親友。

ルックウッド・ザルチム（２１）

ＦＢＩの捜査官で、『千里眼のアイリス』のコードネームを持つ少年で、ユーリやリリー達の親友。
彼らと同じレベル９で、遠隔透視能力（リモートネス・クレヤボヤンス）を初めとする様々な超能力を合わせ持つ。
はるか遠くからでも、何が起こっているか見通す事ができる。

普通の人々

少年サンデー連載作品『絶対可憐チルドレン』に登場する、超能力排斥団体。

『どこにでもいる』という事で、この話の中にも登場。
勝手な理由でエスパーを毛嫌いしている、一言で言うとバカとしか言えない最低の集団。

『絶対最強捜査官』

アメリカ

アスカ・ハートネス（12）『風水念動能力者（エアロ・アクアサイコキノ）』
「・・・へっ！！サイキックゥ～・・・トルネード・スプラ～ッシュ！！！」
ズドォォォ！！

アフリカ

ヒュババババババババ・・・

リリー・ハートネス（２０）『氷体質瞬間移動能力者（アイス・テレポーター）』

「あっ・・・それっと！！アイス・ギゴリアス・バーン！！！」

ビキビキビキッ・・・

リリー

「いっちょあがりっと！」

トン！

ガッシャアン！！

ロシア

ペタッ・・・

キュン！！

リアン・ハートネス（１４）『帯電体質接触感応能力者（エレクトロ・サイコメトラー）』

「上。下上左下右左、右右下上上左、右右下右上左上、下下左上右下左、右左上下下右下上右右・・・それと・・・左上のテープがはがれそうになってるわ・・・」

ペリ・・・

リアン

「クスッ・・・」

ブラジル

『グルルルル・・・グォォォォォォ！！』

ガバアッ！！

サスケ・ハートネス（１０）『深緑物体操作能力者（フォレスト・マインドコントローラー）』
「フッ・・・リーファス・ウィプ・キャプチャー！！！」

ギュルルルル・・・

『グォォォ・・・ン・・・』

ドシャッ・・・

サスケ
「任務・完了！！」

フランス

ユーリ・ハートネス（２３）『重力念動能力者（グラビディ・サイコキノ）』
「チョロいもんだ・・・」

アメリカ－ＦＢＩ組織本部

ジェイムズ・ブラック
「いやぁ、君達の活躍振りはたいしたものだ！どの国からも、感謝の手紙がたくさん来ておるよ！！」

アスカ
「当然じゃんよ、ボス！！アタシら全員『レベル９』の特務エスパーだぜ？」

リリー
「ウチらにかかったら、解決でけへんもんはあらへんわ！！」

リアン
「でもさー、どうせならお金も入れておいてくれればいいのに・・・」

パッ！

サスケ
「リアン姉！！いちいち封筒を透視しない！！」

ユーリ
「ダメだな、コイツら・・・」

ジョディ・スターリング（２３）

「しょうがないじゃない？この子達だって、１人前だと認められたいのよ・・・」

ユーリ
「ジョディはいつもやさしいな・・・」

ジョディ
「もちろん！これでも、あなたの妻ですからね！」

赤井秀一（？）
「それにしても、ミルク・シャローム中尉の予言から、もう5年もたつんだなぁ・・・」

リリー
「時がたつんって、早いもんやねぇ・・・」

リアン
「ミルクおばあちゃん、大丈夫かしら・・・」

アスカ
「確かに、あのセリフを聞いたかぎりじゃ、とても危なっかしそうだったもんなぁ・・・」

ジェイムズ
「心配いらんよ、この前ワシも彼女に会ってきたが、元気そうにしておったからの。」

秀一
「ミルク・シャローム中尉は、アスカ達5人と同じレベル9で、唯一のエスパー・シャーク・・・しかも、彼女の予言はほぼ１００％

の確率で当たる・・・彼女を失うわけにはいきませんからね・・・」

ジョディ
「それよりユーリ、気づいてる？」

ユーリ
「ああ、最近解決してきた数多（あまた）の事件・・・それのどれにも、『普通の人々』が関わってやがる・・・」

リリー
「『普通の人々』・・・ウチらエスパー達を毛嫌いしてる、テロ組織やな・・・」

アスカ
「アイツら、アタシ達の事を子供だと思ってバカにしてやがるんだ！！『怪物』とか『化け物』とか勝手な事言いやがって！！」

サスケ
「そうカッカするなよ、アスカ姉！アイツらは元々負け犬だ！自分達が超能力以上の価値を持っていないから、エスパーを恐れてるんだよ・・・」

リアン
「ケチをつけないように、心を読みまくってあげたらいいのよ。文句の１つも言えないようにね・・・」

サラッととんでもない事を言うリアンに、ユーリ達は唖然となった。

ユーリ・リリー・アスカ・サスケ・ジョディ・秀一・ジェイムズ
「（一番怖いのは、リアンかも・・・）」

リアン
「・・・何か言った？」
ユーリ・リリー・アスカ・サスケ・ジョディ・秀一・ジェイムズ
「な、何も言ってません・・・」
リアン
「ならいいのよ。」
リアンはそう言うと、地下の訓練部屋に向かった。
ユーリたちは、寒気を感じていた・・・

某国ーテロ組織『普通の人々』本部

『我が手下達よ・・・これは命令だ・・・ＦＢＩの特務エスパーを１人、捕らえてここに連れてくるのだ・・・』
「はい、ボス！！」
『子供だからといって油断するなよ！相手はレベル９のエスパーなのだからな・・・』

「はっ！わかっております・・・」

再びアメリカ

地下ーＦＢＩ訓練室

ここは、地下の訓練室。

ＦＢＩ捜査官を鍛えるための場所である。

リアン

「ハアッ！！せいっ！！やあああああっ！！！！」

サスケ達が駆けつけると、リアンは雷が走った竹刀で訓練用のロボット達を破壊しまくっていた。

アスカ

「うわっ、メッチャクチャ・・・」

サスケ

「リアン姉、壊しすぎ・・・」

リアン
「だって、『普通の人々』はいつ襲ってくるかわからないのよ？来たるべき戦いに備えて、体力をつけておかなくちゃ！！」

リリー
「それだけ暴れれば、おなかも結構空くでしょ？」

リアン
「そうね、おなかいっぱい食べれるわ。」

ユーリ
「オマエらも鍛えておいた方がいいぞ、アスカ、サスケ！！」

サスケ
「ほーい・・・」

アスカ
「いっちょやっちゃうか！！」

３時間後、特訓を終えたユーリ達は、食堂で食事をしていた。

アスカ
「親子丼はやっぱおいしいね！」

サスケ

「リアン姉、オマエそんな激辛ラーメン食べるのか？」

リアン
「いいでしょ、好きなんだから！！」

ユーリ
「リリーとリアンは2人そろって、辛い物好きだからな・・・」

リリー
「大きなお世話よ・・・」

秀一
「リアン、そういえばオマエに手紙が来てたぞ。」

リアン
「え、アタシに？」

リアンは秀一から手紙を受け取り、中身を読んだ。

リアン
「これ・・・ラブレターじゃない・・・」

アスカ
「それで、どうするのリアン姉？」

リアン
「行ってくるわ。もちろん、断るつもりだけどね。」

そう言うと、リアンは走っていった。

サスケ
「そういえば、ユーリ兄とリリー姉、今日、人と会う約束があったんじゃ？」

ユーリ
「ああー！！しまったぁ！！」

リリー
「バリー、キース、ザルチムと、久しぶりに会う約束してたんやった！！」

アスカ
「アタシ達が後片づけとくから、２人とも行ってきなよ！」

ユーリ
「そうか、悪いな２人とも・・・」

リリー
「ほな、あと頼むな、アスカ！！」

そう言うと、ユーリとリリーの２人はヒュンッと消えた。

ザッ・・・

リアン

「来たわよー、ラブレターの送り主さーん！」

リアンは辺りを見回した。

リアン
「どこにいるの？いないの？」

その時、声が響いた。

「フフフ・・・ＦＢＩの特務エスパーも、大した事ないな・・・」

リアン
「えっ！？」

「あんなニセモノのラブレターにダマされるとは・・・」

ザザザッ・・・

リアン
「ふ、普通の人々・・・！！！」

イギリス

ハイド・パーク

ユーリ
「こうやって5人で会うのは久しぶりだな、バリー、キース、ザルチム。」

リリー
「元気しとったか？」

バリー・ロズゴート（２２）
「おかげさまで。」

キース・ヴィンセント（１９）
「むしろ、体力が有り余ってるってトコかしら？」

ザルチム・ルックウッド（２１）
「最近は大きな仕事もないからね、ヒマでヒマでしょうがないよ・・・」

ユーリ
「それで、ヒマつぶしのためにオレ達を呼んだのか、オマエら？」

バリー
「うーん、それもあるけどね。」

キース
「あなた達を呼んだのは、最近起きてる事件について話すためよ・・・」

ザルチム

「ここ最近の事件に関わってる『普通の人々』の事でね・・・・」

ユーリ
「ヤツらの目的は、まだよくわかってない・・・・」

リリー
「ただ1つ言えるのは、ヤツらがウチらエスパーを毛嫌いしとるって事や・・・・」

バリー
「ヤツらは目的のためなら、手段を選ばんからな・・・・」

キース
「その事だけど・・・・リアンちゃんがもらったっていう手紙、見せてくれない？」

ユーリ
「ああ、コレだ。」

キースはユーリから手紙を受け取ると、手を当てた。

キュン・・・・

キース
「こ、この手紙・・・・『普通の人々』が書いた手紙だわ！！」

ユーリ
「なんだって！？」

リリー

「じゃあ、リアンが危ないわ！！」

ユーリ
「バリー、キース、ザルチム！一緒に来てくれ！！」

バリー・ザルチム
「ああ！！」

キース
「もちろんよ！！」

その頃、リアンは普通の人々に囲まれ、苦戦していた。

「決して殺すな！！捕らえろ！！」

リアン
「アタシをナメないでよ！！リイス！！」

バシュッ！！

「がっ！！」

「ぐわっ！！」

リアン
「バーガス・リイスガン！！」
ババババ！！
「ぐああっ！！」
「がはっ！！」
「やはりやるな、特務エスパー・・・やむを得ん・・・あれを始動させろ！！」
キュイイイイ・・・
リアン
「うっ・・・！！こ、これは！！ＥＣＭ（超能力対抗装置）・・・！！？」
「その通り・・・しかも、小型化した改良型だ！！」
リアン
「うっ・・・力が抜ける・・・」
「今だ、かかれ！！！」
ドバッ！！
リアン
「！！キャアアアアーッ！！！」

ドサッ！

リアン
「キャッ！！」

「どうだ？捕らえられる気分は？」

リアン
「う・・・うぐぐ・・・」

「ムダだよ。キミの超能力はすでにロックしてある。何より、縛られていては何もできんだろう・・・」

リアン
「くうぅ！！この縄ほどいてよぉ！！」

「うるさいお嬢ちゃんだ・・・オマエら、お嬢ちゃんの口を塞いでくれ。」

「ああ・・・」

男達はリアンに近寄ると、背後に回った。

リアン

「！！」

「少し黙っててくれよ。」

そう言うと、男はリアンの口に布を巻いた。

ギュッ！！

リアン

「ん～、ん～！！」

「さて、と・・・電話をかけるとするかな・・・」

リアン

「う～ん、う～ん！！（た、助けて・・・助けて！！！）」

キュウウウウ・・・ン・・・！！

ユーリ

「どうだ、ザルチム？」

ザルチム

「ああ・・・見える。あの廃棄された倉庫の中から、リアンちゃんの気配がする。オレの透視能力（クレヤボヤンス）からは、どんなヤツだろうと逃れられん！！」

リリー
「ユーリ兄、アスカとサスケに連絡せんでええんか？」

キース
「アタシ達だけでやりましょう。エスパーをナメてるヤツらに、特務エスパーのパワーを見せつけてやるのよ！！」

バリー
「速攻で終わらせるぞ！！」

廃棄された倉庫

「ＦＢＩ本部か？我々は『普通の人々』だ・・・オマエ達の大事な特務エスパーを１人預かった・・・返してほしければ、身代金５億円用意してもらおう・・・」

電話を終えた男は、リアンの方を向いた。

リアン
「！！」

「さて・・・お嬢ちゃんの出番は、ここまでだ・・・」

リアン
「んっ、んんっ・・・（くっ・・・あのＥＣＭさえなければ・・・）
」

「終わりだな・・・」

ジャカ！！

リアン
「んっ・・・！！！（だ、誰か・・・！！！）」

その時、叫び声が聞こえた。

ユーリ
「ギガンド・グラビドン！！！」

ズゴオオオォ！！！

「な、何！？」

「ＥＣＭが・・・陥没した！！？」

ザッ・・・

リアン
「！！」

ユーリ
「リアン！！」

リアン
「（ユ、ユーリ兄・・・・！！）」
「ちっ・・・他の特務エスパーか・・・・」
「こうなったら、生かしては帰さんぞ！！」
「かかれぇ！！」
男３人が、リリーに飛びかかった。
ガシッ！！
リリー
「あらあら・・・むやみにウチの体に触れへん方がええで？」
リリーがそう言った次の瞬間、男３人が一瞬のうちに凍り付いた。
「な、何ぃ！？」
リリー
「ウチの体に触れた者はな、－２７３℃の凍気で瞬時に凍り付くんやで～？」
「ならばキサマを！！」
ババッ！！
ユーリ

「どっちを向いている！？」

「！！」

ユーリ
「リオル・ネシス！！」

ギュドオ！！

「ギャアアアア！！」

バリー
「ディーガル・イークロウ！！！」

バキイイィ！！

「がああああ！！」

キース
「アルバトロス・アクアリアン！！！」

ジュバアアアァ！！

「ぐおおおお！！」

ザルチム
「ネオジ・ディップ！！」

ザン！！

ザルチムのナイフが、リアンの縄を切り裂いた。

ユーリ
「オマエら、これで終わりだな・・・」

「く、くそぉ！！」

男達は、逃げようと走り出した。

ダッ！！

ユーリ
「逃がすかよ！！アイアン・グラビディ！！！」

ズゥン！！

「がああああ！！」

「ギャアアアア！！」

バリー
「今だ、リアンちゃん！！」

キース
「あなたをイジメたコイツらに、仕返ししてやりなさい！！」

リアン
「はい！！アアアアア・・・」

リアンは、ものすごい速さで雷の力をためていく。

ザルチム
「今まで受けたダメージや憎しみを、一気にパワーに変えてぶつける、リアンちゃんの最大術・・・」

リリー
「まともにくろたら、ウチらも危ないな・・・」

リアン
「いくわよ・・・チャージル・リアフォドン！！！」

ガアアアア・・・

ギャン！！！

ドギャアアアア！！！

「ギャアアアア・・・！！！」

ドサッ！

リリー
「死んでしもたんやないやろな？」

バリーとザルチムが、男達に駆け寄った。

バリー
「イヤ、死んでない・・・」

ザルチム

「気絶しただけだよ・・・」

キース
「よかったわね・・・」

その後、男達は逮捕され、連行されていった・・・

そして、その夜・・・

服部岩蔵
「リアンよ・・・オマエは雷の力を得た能力者だ・・・」

レイン・ハートネス
「でも、あまり人を傷つける事に力を使ってはいけないわよ・・・」

リアン
「はい、お母さん・・・」

レイン
「じゃあ、もう寝なさい・・・寝不足は、お肌の大敵よ？」

リアン
「はい・・・お休みなさい、お母さん・・・」

「・・・リアンちゃん！起きて、リアンちゃん！！」

刃
「え・・・？」

ムクッ・・・

刃
「し、志保ちゃん！！」

哀
「大丈夫？リアンちゃん、電車に乗ってからずっと寝てたよ？」

刃
「ず、ずっと・・・？」

コナン
「そう、ずっと！」

隆太
「何かいい夢でも見てたの？とても気持ちよさそうにしてたけど・・・」

刃
「まぁ、そんなところかな？」

コナン
「みんな、もうすぐ京都に着くよ！」

刃
「夢・・・」

哀
「え、どうしたの？」

刃
「あ、ううん、何でもないの・・・」

コナン
「さあ、仲間を探しに行こう！」

隆太
「ああ！」

哀・刃
「ええ！」

コナン達は、京都駅を出て、歩きだした。

刃
「（お父さん、お母さん、リリーお姉ちゃん、アスカ、サスケ・・・みんなの仇は、必ずとってみせるわ・・・新一君達の助けを借りて・・・）」

そして刃は、コナン達を見つめた。

刃
「（黒の組織を無事に壊滅させるその日まで・・・よろしくね・・・新一君、志保ちゃん、隆太君・・・）」

刃はクスッと笑うと、コナン達の後を追っていった。

（後書き）

どうだったでしょうか？
このお話は、リアン・ハートネスの過去のお話です。
お楽しみいただけましたでしょうか？
さて、この話の中にも出てきた、バリーとキース。
［［黒の組織との決戦！！そして・・・］］では名前だけの登場で、何者なのかわからなかった人達も、これで謎が解けたと思います。
もちろんこの２人は、ザルチムも合わせて［［ＦＢＩから来た女］］の今後の話にも出す予定ですので、楽しみにしていてください。
それでは、［［ＦＢＩから来た女］］もぜひお楽しみください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7153a/

絶対最強捜査官～リアン・ハートネスの物語～

2010年10月20日23時09分発行